

第 4 次芦屋市地域福祉計画策定に係る「地域の福祉を話し合う市民会議」

目的

- (1) 第 4 次の計画に芦屋市の地域福祉に関わる様々な人の思いやニーズを反映するため、現行計画に関連する地域の福祉活動等に参加している市民同士が、日頃感じている地域生活課題や活動の成果、活動をする上での問題を共有し、未来に向けた理想の姿や課題解決に向けた取組を考える。
- (2) 市民会議への参加者をはじめとし、地域福祉に関わる活動者の輪を広げる。

市民会議の構成

地域発信型ネットワークや地域福祉アクションプログラム推進協議会への参加市民、公募市民、関係機関、市職員等

開催までの経緯

当初、8月から12月にかけて全5回の市民会議を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開催時期の変更、回数の削減、時間を短縮して実施した。

また、事前に話し合いたいテーマについて、市民委員にアンケートを実施し、希望の多かった4つのテーマを取り上げ、ワークショップ形式で行った。

市民会議事務局

芦屋市社会福祉協議会、芦屋市福祉部地域福祉課

関係機関

芦屋市高齢者生活支援センター

地域支え合い推進員（生活支援コーディネーター）

障がい者基幹相談支援センター

第1回

日時・場所 令和2年10月23日（金）午後2時00分～4時00分 保健福祉センター3階多目的ホール
テ－マ 「世代・属性を超えたつながりや居場所づくりについて考えよう」
参加者 36名（内訳：市民委員 15名 関係機関 13名 事務局 8名）

第2回

日時・場所 令和2年11月10日（火）午後2時00分～4時15分 保健福祉センター3階多目的ホール
テ－マ1 「地域からの孤立をなくすための地域づくりを考えよう」
テ－マ2 「災害に負けない地域づくりを考えよう」
参加者 36名（内訳：市民委員 16名 関係機関 10名 事務局 10名）

第3回

日時・場所 令和2年12月5日（土）午前10時00分～12時30分 芦屋市役所東館3階大会議室
テ－マ 「地域活動への参加者や担い手を広げよう」
参加者 31名（内訳：市民委員 14名 関係機関 8名 事務局 9名）

市民会議の意見まとめ

福祉 学習

- ◆中学生・高校生によるまちづくり会議で、まずは地域に興味を持ってもらうのどうか
- ◆若い人への福祉教育が必要

情報発信 周知・啓発

- ◆スマホの使い方を教えることがきっかけとなり、つながりを広げていけるのではないかと（高齢者等へのスマホ勉強会には教える人も必要）
- ◆個人に合うイベントの紹介ができればいい（ビラの配布も効果的）
- ◆自治会等が持つ地域の人々のリストをみんなで共有できるといいのではないかと
- ◆情報交換できる知り合いをつくっておく、イベントなどに参加すると情報を得られる（自ら動く）
- ◆情報難民をなくすための何かしらの取組や外国人のための相談コーナーが必要

【声掛け・あいさつ】

- ◆近所の人たちが1日1回声を掛け合う関係をつくる必要がある
- ◆自らあいさつすることや、ダメもとでもイベントの声掛けなどやっていくことが大事
- ◆散歩など毎日のルーティンで顔を知ってもらうようにしてはどうか
- ◆回覧板を回す際には、ポストインではなく直接顔を合わせるようにするといいいのではないかと
- ◆声を掛け合う関係性を築きやすくするため、おせっかいなおばちゃんももっと増えればいい

【居場所・行き場所】

- ◆ここに行けば何かがあり、敷居が低く、誰でも行ける場所（「逃げ場」でなく「行き場」）が必要
- ◆商店街のおばちゃんみたいに、いつもそこにいてくれて、安心できることが大切
- ◆近所の公園、福祉避難所（普段からの居場所であれば避難所へ迷わず行ける）、コンビニなどを居場所として活用してはどうか
- ◆地域でやっている食堂、カフェなどを地道に続けることが大切
- ◆高齢者は病院通いしている人が多いので病院に、人は必ず買い物には行くので、スーパーマーケットに何か仕掛けができないか

【イベントの開催】

- ◆花火や餅つきなどの伝統イベントは世代を超えて人気で人が集まり、多世代交流のきっかけとなるのではないかと（子どもが動けば全世代が動く）
- ◆趣味や経験など皆が特技を教え合ったり、退職後で時間のある高齢者が先生となり、寺子屋のようなイベントを定期開催したりするなどの世代間交流をしてはどうか
- ◆マンションごとにお茶会、親睦会を開催してはどうか
- ◆担い手になる中高年の心を引くようなイベントにする必要がある
- ◆人がつながるためには、楽しいことをしないといけないと思う

【関係機関・専門機関につなぐ】

- ◆気になる人を関係機関へつなげる仕組みがあればいい
- ◆民生委員・児童委員や自治会長などが専門機関へつなぐキーマンだと思う

【人材発掘】

- ◆引っ張ってくれるリーダー的おばさん、地域活動に熱意のある核になる人がいることが必要
- ◆担い手のやりがいを見出すことや、地域活動の魅力を伝えることが必要

地域 コミュニティ

災害時
支援

【ご近所同士の関係づくり】

- ◆隣人の顔が分かっている、情報を隣近所へ伝えられるような関係性、きずなを深め、ともに助け合う関係を築くことが必要
- ◆10世帯ほどの小単位の班を作っておき、防災活動、情報発信、避難の際の誘導で声をかけるなど、支援の役割をそれぞれが把握しておく取組はどうか
- ◆若宮町を具体例に「助け隊」の援助体制を構築してはどうか
- ◆1人での避難に不安がある人に事情を説明いただき、訓練時に実践してみるといいのではないか

【防災学習】

- ◆出前防災の企画、どのレベルで避難するのかなど学習の機会が必要

【防災訓練・催し・イベント】

- ◆エリアごとの避難訓練を色々な場所で、年に複数回実施する（ゲーム、スタンラリー形式など楽しく工夫する必要あり）といいのではないか
- ◆防災のイベントは世代を超えて参加があるので、交流するにも効果的

【いざという時に備える】

- ◆それぞれが災害時の持ち出しバックなど、日頃から備える必要がある
- ◆災害が起こった場合に備え、どこに、どのルートで避難するかを家族で話し合っておく必要がある
- ◆一軒家など、耐震性の向上を図るべき
- ◆車いすの場合などは、個別で避難計画を策定する必要がある
- ◆自治会において地域で救助班を決めるなど、防災台帳を活用する取組を広げられないか
- ◆避難の目印となる（黄色いハンカチなど）仕組みがあると、実際の支援時に役立つ
- ◆行政には防災ネットの普及や防災士の育成に力を入れ、災害に負けない意識づくりを実践してほしい
- ◆行政は要配慮者の名簿を整備していくべき

協働と
参加支援

- ◆地域の活動を広げていくために、どうにかして企業（働く人）に福祉マインドを伝えていく必要がある
- ◆領域やジャンルを超えて企業等が協力（協賛）してくれれば、地域の活動が広がる
- ◆みんながそれぞれに持つ好奇心を、地域の活動の方へ結びつけることができるといい
- ◆昔のような駄菓子屋や商店街に代わる居場所として、コンビニや量販店の可能性は探れないか
- ◆気軽に参加できる機会（清掃活動など）で、ゆるやかにつながることから始めてはどうか
- ◆社会との関係があまりない人たちにも、したいこと、やるべきことがあるといった役割があれば外に出るのではないか

【参考】第4次芦屋市地域福祉計画策定のための主な検討項目

1	福祉学習	2	情報発信 周知・啓発	3	地域コミュニティ	4	支援者の人材育成	5	包括的相談支援
6	認知症に関する施策	7	再犯防止	8	災害時支援	9	協働と参加支援		